

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

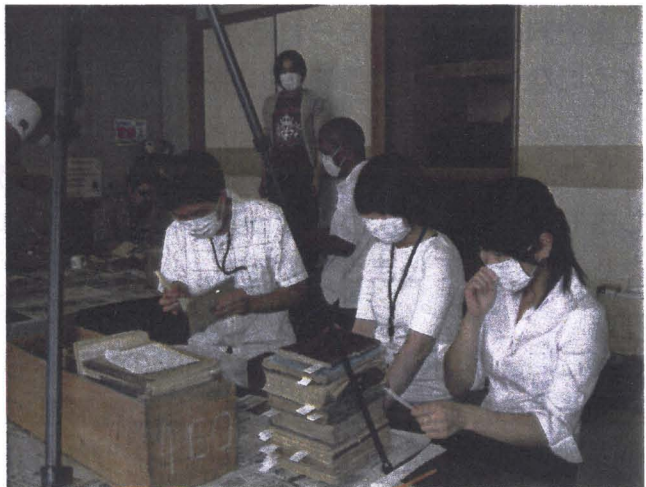
史料ネット News Letter

第55号 2008年10月10日(金)

発行：歴史資料ネットワーク



▲田尻早苗家文書史料修復作業のようす



▲ 田尻早苗家文書史料整理作業のようす

目次

巻頭言

「学びの場」としての史料ネット

中野 賢治…2

火垂るの墓

長 志珠絵…6

◆◇特集◇◆

「四川大震災と文化財保全」 …3

四川大震災に関する文化財の被害及び現地のとりくみについて 脇山 佳奈…4

四川大震災からみた文化財保全や史料について 高橋 淳夫…5

「漉きばめ」による史料修復研修を受講して 河野 未央…8

田尻早苗家文書 仮整理作業について …11

参加記 川内 淳史 …11

参加記 森脇 崇文 …12

NewsLetter2008.10.27 No.55

「学びの場」としての史料ネット

中野 賢治

今年度から新たに副事務局長となりました、中野と申します。

私は長野の出身です。13年前の阪神・淡路大震災は、その時の私にとってはあくまでテレビの中の出来事でした。衝撃的な映像や甚大な人的・物的被害は知識としてはあっても、決して実感を伴うものではありませんでした。その後、縁あって史料ネットとかかわるようになり、様々な講座や催しに参加させていただくなかで、改めてその被害の大きさと資史料の救済にあたられた方々のご苦労とを、少しずつではあるにせよ、考え、わかるようになってきたように思います。

しかし同時に、震災を直接経験していない方々にいかに「伝える」か、ということの難しさも、痛感するようになってきました。人は、興味のないことは知らなくてもよいものとしてすませてしまうものです。

そこに、今後の史料ネットの活動の重要な柱である、若手企画と名付けられた講座の役割があるのだと認識しています。12月7日にはその一つとして、「震災・記憶・史料～阪神・淡路大震災の歴史的検証～」が開かれますが、これはまさにその「伝える」ことの困難さに正面からぶつかっていく企画になるはずです。また現在、中世の災害史についても、講演・シンポジウムを企画中です。

その中世のシンポジウムの企画にあたって、私には一つのわがままなこだわりがあります。史料ネット云々をとりあえず考えから外し、自分が聞きたい話は何か、というところから講座を構想したいのです。まずは自分自身にとって「楽しい」企画を立て、そこに参加された方々から多くを学ぶとともに、その感覚を共有できるような、そういう「学びの場」を作りたいと考えています。それはまた、震災を経験していない参加者が、その経験の一端を共有できる場を開くことにつながるはずです。

少々大風呂敷を広げた観はありますが、史料ネットの今後の企画にご期待ください。

(なかの・けんじ／歴史資料ネットワーク副事務局長)

四川大地震と文化財保全

2008年5月12日、中国の四川省で発生した四川大地震では、死者が8万人以上にのぼるなど大きな被害をもたらしました。震災直後は、マスコミでも大々的に取りあげられましたが、時間が経つにつれ情報が減ってきています。そこで本号では、四川大地震に関する特集を組み、実際の被災状況を知る脇山佳奈氏と高橋淳夫氏にご寄稿いただきました。

脇山佳奈氏（広島大学大学院考古学専攻）は、地震発生当時四川大学に留学しており、大震災の惨状を目の当たりにされました。ご自身の経験をもとに、文化財の被害状況や現地のとりくみについてのレポートをお寄せいただきました。

また、去る7月12日、関西学院大学災害復興制度研究所にて「中国四川大地震現地報告会」がおこなわれました。史料ネットからは、板垣（事務局）と人見佐知子氏（会員）が参加し、活発な議論に加わりました。その報告会で報告された高橋淳夫氏（人と防災未来センター研究調査員・読売新聞大阪本社）に原稿を依頼しました。高橋氏は5月25日～30日にかけて被災地に赴き調査され、文化財保全にも強い関心をお持ちです。

隣国での大災害に対し、史料ネットして何ができるのか。四川大地震では現地での初期活動に参加することはできませんでしたが、今後も関心を持ち続け、議論していく必要性を感じています。

松下正和（史料ネット事務局長）・板垣貴志（史料ネット副事務局長）

■ 四川大地震に関する文化財の被害及び現地のとりくみについて



▲写真1 成都市武侯祠孔明殿の修復の様子
（壁をつみなおしている。6月30日見学。）

脇山 佳奈

筆者は、5月12日に震源地である汶川から約95km南に位置する四川省成都市内で四川大地震に遭遇した。この地震では、断層上に位置する地域を中心に8万人以上が亡くなるという大きな被害が生じた。ここでは、四川大地震に関する文化財の被害状況及び現地のとりくみについて簡単に紹介したい。

文化財の被害状況については、四川省・陝西省・甘肅省・重慶市・雲南省・山西省・湖北省において、169か所の全国重点文物保護単位、250か所の省級文物保護単

位、2766 点の博物館等所蔵の文物に被害が生じていると報道されている。169 か所という数は、全国重点文物保護単位の 7 %に相当し、非常に多くの文化財に被害が生じたことがわかる。また、修復には 57.4 億元（約 861 億円）もの金額が必要と報道されている。その中でも、世界遺産の都江堰・青城山の修復費用は、8 億元（約 120 億円）と多額の費用が必要である。なお、成都市博物院院長の王毅氏によると、修復費用はそれぞれの被害にあった文化施設が、銀行からお金を借りるなどして資金を工面しており、国家予算が出ている段階ではないとのことである。また、これらの文化財の修復は、国や各省の修復を行う機関が中心となって進めており、外国からも一部援助しているとのことであるが、被害の件数が非常に多く、修復を行うことのできる機関が不足している状況とのことである（7 月 10 日時点）。

文化財の修復活動以外に、四川省では、震源地の汶川に地震博物館を建設するための活動が 5 月から行われている。6 月初頭には、四川大学考古学専攻の学生が、被害の大きかった都江堰市で、震災に関する資料の収集を行った。資料は、教科書・カバン・救出の際に使用した道具などである。これらの資料は、建設予定の地震博物館に展示・保存するとのことである。遺族の承諾を得て被災地の資料を収集するということは精神的な負担が大きいと判断し、私は参加することを断念した。私に何かできることはないかと、四川大学教授の黄偉氏に尋ねたところ、地震博物館の参考資料として、阪神・淡路大震災記念人と防災未来センターのホームページの提出を依頼されたので、中国語に翻訳して提出した。

なお、私は 6・7 月に、成都市内の文殊院・武侯祠（写真 1）・大慈寺・基督教青年会（写真 2）・杜甫草堂、そして震源地から約 30km 離れた地点に位置する都江堰市内の都江堰・青城山を見学し、被害や修復の状況を確認した。成都市内の寺院などは倒壊しているものは少ないのだが、瓦の落下、壁や塀に亀裂が入るなどの被害がみられた。古代に建設された水利施設



▲写真 2 成都市基督教青年会の修復の様子（建物の一部にひびが入っている。7 月 12 日見学。）

である都江堰では、川の対岸から二王廟などの建築群を観察した（写真 3）。建築物が倒壊している様子をうかがうことができ、これから長期にわたって修復する必要があると感じた。被災した文化財の修復には 5 年以上の年月がかかるといわれている。四川大地震を体験したものとして、被災地の一日も早い復興を祈るとともに、今後も文化財の復興についても見守っていきたいと考えている。最後に多くの被災者の方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。



▲写真 3 都江堰市都江堰王廟の様子（建築物が一部倒壊していることがわかる。7 月 18 日見学。）

（わきやま・かな／四川大学高級進生）

■四川大震災からみた文化財保全や史料について

高橋 淳夫



文書が散乱する庁舎の倒壊現場
(アジア防災センター提供)

四川大地震から約2週間がたった5月27日、私たち、人と防災未来センターとアジア防災センターの調査団は、四川省綿竹市の地方政府庁舎の倒壊現場にいた。足元には、様々な重要な文書が野ざらしのまま散乱していた。雨や震災の粉じんで変色がひどく、強い風が吹くたび、一部は飛ばされていった。傍らに段ボールが用意されるなど、散逸を防ごうと努力した痕跡はあったが、倒壊した建物のがれき撤去などに人手をとられ、文書の山はほぼ手つかずの状態に残っていた。「命や生活にかかわる部分が最優先」という現地の人の言葉にうなずきながらも、

これらの文書が失われることによる復興への影響を案じずにはいられなかった。

今回の地震では、世界的遺産の二王廟（都江堰市）といった歴史的建造物のほか、美術品や文書を管理していた博物館や資料館も大きな被害を受けた。私が見た野ざらしの文書は歴史資料ではないにしろ、被災施設の状況は容易に想像がつく。ある中国当局者は「多くの貴重な文化的財産が失われつつある。国家にとって大変な損失だ」と苦悩していた。

中国当局は8月、復興基本計画を公表した。文化財修復を重要課題に位置づけ、二王廟など200以上の文化遺産や、茂県チャン族博物館や北川チャン族民俗博物館など100を超える文化関連施設の修復を目標にした。産業の柱だった観光業の立て直しとともに、少数民族の生活文化の伝承やアイデンティティの保持にも配慮した。しかし、実際の作業がどのように進められるのかなど、不透明な部分も多い。また建造物や美術品が優先され、文書などには手が回らないのではないか、という懸念もある。

我が国ではどうだろうか。文化財保護法を中心に、被災した文化財を修復する枠組みは整っている。しかし建造物への意識が強く、文書や資料への取り組みはまだまだ、との印象が否めない。そこをサポートしてくれているのが歴史資料ネットワークといったボランティア団体なのだが、活動の認知や理解、支援の広がり是十分とはいえない。

四川大地震については、国や兵庫県など我が国の様々な行政機関が支援の方向性を探っている。資料ネットなどの団体をバックアップして、ノウハウを伝えていくことは、文化財修復で見落とされがちな文書の分野をサポートすることになるうえに、両国の市民団体同士の草の根交流を深めることにつながるのではないだろうか。また我が国でも、四川大地震を教訓にすれば、▽歴史的建造物に加え、美術品や文書を保管している施設の耐震性を強化▽防災教育などで文化財や歴史資料を保全することの大切さを周知一していくことが重要になると感じた。

(たかはし・あつお／人と防災未来センター研究調査員
※読売新聞から出向)

屋根が落下した利水施設「都江堰」の門（アジア防災センター提供）



空襲の記憶・未来への語り

一記念講演会「神戸空襲と『火垂るの墓』」参加記

長 志珠絵



2008年8月10日午後、「火垂るの墓を歩く会」の発足10周年記念講演会が開催された（主催「火垂るの墓を歩く会」、協力「神戸空襲を記録する会」「歴史資料ネットワーク」）。辻川敦さんの経緯説明に続き、兵庫県立友が丘高校放送委員会作、創作ラジオドラマ「潮騒の記憶」、同じく同校中村あづみさんによるビデオドキュメンタリー「わすれないー1945神戸」は空襲経験の記憶と記録のありかたをインタビューで綴った力作。

前者、3・17の空襲の一夜を描いた作品は音だけで構成されるためか、登場人物の行動—心情説明が工夫されている。疎開先から主人公が帰神した理由は、高等女学校入試。あるいは燃え盛る場から逃げなかった姉の行動の直接の理由は、「火を消せ」「逃げるな!」と迫る警察の存在。防空法下での防空義務の履行やことに「受験」が戦時下でも機能していた現実、現代の受験世代にもインパクト大か。映像の時代にあって、「音」の持つ力の新鮮さを再発見させられる作品だが、エンディングは「話したくなかった」という祖母に「おばあちゃんが生きていてくれたから私がいるねん」。抽象化された体験ではなく、顔の見える個々の関係から、過去の体験を想起し、現在へ語りつなぐ積極的な意味を提起して幕を閉じる。

後半は、神戸空襲を記録する会の代表中田政子さんと「神戸空襲絵巻」の作者、仏画家豊田和子さんの対談。最後は「火垂るの墓を歩く会」を主催してこられた正岡茂明さんの講演「小説『火垂るの会』の舞台」と盛りだくさんなものであった。

中田さんと豊田さんは、前半の中村さんの作品中、インタビューに応じた側。いわば実写映像を見た後、作中の人物が目の前に登場する段取りとなった。戦後生まれ、遺族であると同時に、長年にわたって「空襲を記録する会」の代表を務めてこられた中田さんと戦時下、16歳の女学生時代に3・17の空襲で焼け出された豊田さん。2005年、豊田さんの『神戸空襲絵巻』を通じお二人の出会いが始まった。戦争を挟んだ世代であるお二人は今年、積極的に「行脚」を続けておられる。この日は中田さんが豊田さんに様々に質問し、話をひきだす形式だった。余談ながら、中田さんの会長としての役回りを見聞きしてきた私は当初、はらはら気味だった。当事者ではないとはいえ、中田さんはいつもインタビューを受ける側におられ、人々の想いを伝える重い役目を務めて来られたように感じていたからだ。だが予想はいい意味で全く裏切られた。中田さんの問いかけは、次々と豊田さんの深い想いと発言を引き出すと同時に、お二人の経験のズレが逆に、現在とは何か?いまの時点で過去の戦争の記憶と体験にどう向き合うのか?緊張を伴いつつ、新たな発見をもたらしていたように思う。

印象深いお話がさらに広がっていく例は多かったが1つだけ。例えば映画『火垂るの墓』の感想として一般的な、「おばさん」の主人公兄妹への惨い仕打ちをどう考えるか。戦後生まれの中田さんは憤慨派だが、周囲の戦争経験世代の感想は彼女と異なるものだったという。確かに少し見渡せば、縁戚の孤児への仕打ちは例えば『硝子のうさぎ』など戦争児童文学に共通する。豊田さんは、「おばさん」像がむしろ時代の平準だったことを指摘する。「あのおばさんだけがひどい人だったのではない。自分の子どもを守るのが精一杯」。こうした指摘は、豊田さんが淡々と語るご自身の体験の語りを通じて私たちにリアルに迫ってきた。「火だるまになる」ことが何と簡単か、と感じたという猛炎のなか、見つけた防火水槽の隙間を奪い合うようにして恐怖の一夜を生き延びた一家は、早朝みぞれのふるような寒さの中を六甲へと向かうが、1キロ東へ行くと家は焼け残り、そこには戦時下とはいえ日常生活があった。しかし人々は、ずぶぬれになりすすけた一家に、水の一杯もくれる人もいない。家が焼けて大変だった、と誰も言ってくれない。まさに「焼け出されたものは嫌われ者」であり、それが「あの時代の人々」、戦争の時代の人々の心のありようなのだ、と。加えて疎開先には焼け出された縁戚の子どももいたが、5歳の坊やに「1粒の豆も分けてあげられない」経験は澱のように豊田さんの心に淀む。だがそれは絶対的な物資不足に還元されるものでもなければ、仕方なかった一と過去を追認するためのエピソードではない。それほどまでに荒んだ人の心を作るしくみ—例えば教育の影響の深刻さを豊田さんは指摘する。戦時下の教育は戦時下の心構えとして他人との競争をあおる一方、私情の排除を強調し、親兄妹が壁の下敷きになっても見捨てて任務を遂行せよ、と迫った。だが教育は、16歳の女子学生に生き残るための危険を教えなかった。消化任務に終始した防空教育は、焼夷弾に当たれば死ぬ—というシンプルな事実を女学生に教えなかった。雨のように焼夷弾が降り注ぐ中、16歳の豊田さんは初めてその現実を知ったのだという。

では「おばさん」のふるまいに個々の＜私＞は何を感じるのか。中田さんは戦後教育を受けてきたものとして、困っている人に手をさしのべる、共感し、共に支えあう—という価値観を習得してきたことを強調した。戦時下、絶対的弱者である戦災孤児へのおばさんのふるまいは、中田さんが習得してきた人権意識や感覚に根底で対立する。私は1970年代に公教育を受けた世代だが、学校での戦後教育の理念や理想の共有を痛感した。私もまたこれらの理念を戦後の学校文化を経て習得した世代であり、そうした人権意識はさらに深められこそすれ、古びたものだとは思わない。

戦時下の人の心性としてショッキングな様々なあり方（六甲までの道すがら、体力の消耗が激しく、途中歩けなくなるほどになった豊田さんのお父さんを治療してくれた知り合いの医者は、お父さんがずぶ濡れのポケットからまさぐって出した治療代を、しかし「受け取った!」）と「おばさん」の言動は通底する。しかしこれらを個人の責に帰す発想としてでなく、構造的なもの、戦時下の社会—権力が求めた青写真の成果としてとらえる見方を私たちは学ぶ必要がある。

と同時に、今の時点での「おばさん」の言動への強烈な違和感は、戦後の人権意識が培ってきた、私たちの社会が手放してはいけないもの、もっと深化させ、共有せねばならないものとして再認識する必要があるだろう。彼我の距離の発見はそこにとどまるべきではない。豊田さんは別の機会に、震災と戦時下の人々の心のあり方の違いを指摘されたこともあり、私ははっ

とさせられた一人でもある。お二人の淡々とした語りは、過去の再認識を通じ、今の私たちの足場への再認識をうながすものだった。

だが学びの場は必ずしも豊富ではない。学校教育、ことに公教育を経た後の人々にとって「戦争」を含めた現代史を「学ぶ」場はなく、歴史表現の多くは、イデオロギーと「商品」の論理にさらされる。それが私たちが暮らす社会の今の現実だろう。加えて戦後教育の中身を辿れば、戦争を含めた現代史が公教育に登場する歴史は短い。私たちの社会では多くの人々は、戦争―戦後史を社会的に共有していない。では家族や体験者は自在に語ってきたのだろうか？語りを「聞く」しくみはあるのだろうか？正岡さんの、『火垂るの墓』の10年を振り返る講演では当初、児童・生徒を対象としていた企画が逆に実体験を持つ人々への参加者の拡大という誤算を生み出した経緯が述べられていた。FWに参加する側、講演を聴く側にもおそらく「話したくなかった」体験と向き合う志向が見え隠れする。豊田さんもまた、戦時下の経験を「話したくない」人の一人だった。それぞれの人生にはなぜいま、この時点で思い出したくない経験を他者に向けて語るのか、個別の理由を越え、現在への危機感をふまえた未来志向がある。戦争の語りはけして過去のものではない。

都賀川の痛ましい事故の記憶もまだ鮮明なこの日はとにかく暑かったが、午前中のウォークに引き続いて、年配者を中心に参加者は60-70名だろうか。新聞社も数社、カメラも入った。途中で抜ける人もなく、会場は徐々に熱気を帯びていった。市民の目線で自分たちの地域の近い過去を語り、学び、世代を越えて共有しあうこうした取組みの重要性を改めて再認識し、暑さで陽炎の立つ歴史的建造物・御影公会堂を後にした。ロビーでは放送部の高校生が会場で出会った「語り始めた人」にビデオカメラを廻し、インタビューを行っていた。主催者の皆さま、ありがとうございました。

(おさ・しずえ／神戸市外国語大学准教授)

「^す漉きばめ」による史料修復研修を受講して

河野 未央

1. はじめに～研修にあたって～

史料ネットでは、2004年の台風23号被害において、水損史料のペーパータオルによる吸水乾燥を行ってきた。もっともこれは史料を災害からギリギリのラインで救う、いわゆる「応急措置」として行われたものであった。専門家による指導のもと、ボランティアを組織して本格的に取り組んだ修復作業は、史料ネットとしても初の試みだった。

このような経験をふまえて、この間、史料ネットでは、災害時に備え、関西圏を中心とした各大学・自治体、市民の方々に対して水損史料の修復ワークショップを行い、経験や技術を伝えてきた。ワークショップの参加者はいずれも熱心で、講師として赴くといつも質問攻めにあう。その内容は、最初は吸水乾燥の技術的な、細かな点からはじまり、次第に多岐にわたっていく。日常的におこる史料の劣化、破損の際の修復方法、日常的な史料のケアの方法等々。ごくごく基礎的な知識で答えられるものについては、その場で応ずることもできたが、修復の専

専門的知識が必要とされる内容もいくつかあり、それらについては十分な回答ができないままに終わらせてしまっていた。

ワークショップを繰り返すたびに、災害時だけでなく、日常的におこる史料の破損・劣化への対応をしたい、史料を守りたい、という声・ニーズの大きさがひしひしと伝わってきた。こうした声に、どう応えていけばよいのか。災害時と日常、いずれにも対応できる史料保存に関する総合的かつ体系的な技術・知識の取得の必要性を感じていた。

そのようななか、このほど神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターで、「漉きばめ」による史料修復の研修会が行われることを知った。「漉きばめ（リーフキャストイング）」とは、和紙の紙漉の原理を利用して、虫に喰われるなどして穴があいた部分に紙漉を行い、水に溶かした紙の繊維を流し込む（嵌める）方法である。重要な史料修復技術・知識のひとつが習得できる格好の機会ということで、すぐに参加を志願した。研修会の日時等は下記の通り。

日時：2008年8月20日（水）10時半～17時

21日（木）10時～12時

場所：神戸大学文学部3階古文書室

講師：多仁照廣氏（敦賀短期大学教授）

主催：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター

後援：コンソーシアムひょうご神戸

2. 研修の内容

（1）講演の内容



20日は同センターの研究員、各自治体の文化財担当職員、学生、市民の方々を含めて17名、21日は7名の参加者があった。

最初に多仁講師から、ご自身が史料修復に関わるようになった経緯についての説明があった。史料を守る力が弱くなった「地方」の史料を守るにあたり、大学で地域での総合調査とともに、史料修復にも取り組んでいращやるとのことであった。

次に、史料修復の心構えについての説明があった。印象的だったのは、第一に、史料修復等「手を加える」ことは史料にとって本来望ましくなく、修復の段階にいたらないよう、そのための保存の方法を考える必要がある、ということ。これと関連して、第二に、修復は文書の折り目等の「原状」を破壊することなので、その記録を丁寧にとることが重要だということ。この二つは史料保存に関する文献で得ることのできる知識であり、「原状」記録の重要性は、古文書整理の前などに私も自らの口で説明したこともあった。つまり「知っていた」ことだった。しかし自分で実際に修復作業を行った後、すなわち原状を「破壊」した後では、実感の度合いが全く異なった。

第三は、史料の扱い方について。史料を扱う前後には手洗いをする、史料のそばでの飲食は厳禁、記録をとる際には、シャープペンシルを用いない等こちらも史料の扱い方としては、ごくごく基礎的な内容である。しかし、

NewsLetter2008.10.10 No.55



実感という面で言えば、多仁講師の次のような説明が特に印象的だった。多仁講師が大学で修復の授業を行う際は、サンプルなどを用いず、実物で実習させるという。そして、受講する学生に対しては、「世界で唯一の史料の修復にあたっているんだ」「君たちがもし下手な処理をすれば、その史料から得られる貴重な情報は、二度と再現することができないんだ」という注意を与えてから、作業にあたらせているそうだ。自戒も込めてふりかえると、史料の扱いは、史料に触れる機会が多く、より身近になってくることで逆にぞんざいになってしまうこともある。目の前の史料に対して、一定の緊張感を持つことの重要性を認識するとともに、その伝え方も学ばせていただいた。

(2) 「漉きばめ」の実習



実習では、最初に多仁講師から実演とともに手順の説明を受けた。時間的制約から多少簡略化された部分もあったが、実習では主に i 文書の撮影、ii 虫食い等史料の破損部分の体積の測定（流し込む繊維の重量を決定するため）、iii 史料の下準備（解体、クリーニング、折り目をのばす等）、iv 漉きばめと繊維を史料に定着させるための加圧、v 史料の復元（整形）の5つの段階について、i～ivを20日に、vを21日に行った。

iiの作業は、デジタルカメラで撮影した史料の画像をパソコンで取り込み、フォトショップを利用して行うというものであった。また、実際に作業をしてわかったのは、ivの漉きばめの段階はほんの一瞬で作業が終わること、最も時間がとられ、また修復後の史料の状態を左右するのは、iiiとvの作業だということである。慣れないフォトショップの操作などに戸惑いながらも、他の工程については、素人でも丁寧に行えばなんとか対応できる範囲のものであるが、しかし、iiiとvについては、繰り返し作業を行うことによる習熟が必要であると感じた。

3. おわりに～研修を終えて～

今回の漉きばめ方法は、じつは「本格的な修復を、予算をかけず、身近な材料で行うにはどうすればよいか」という視点から徹底して考えられ、工夫されたたいへんユニークなものである。今回実習に向けて用意された用具は大半がホームセンター等で手に入る。また、繊維を流し込むにあたって必要な木枠（当日はプラスチックの枠を使用）、繊維を史料に定着させるための加圧機など機材も、いずれも手作りのものであった。ちなみに、当日一緒に受講されていた一般の女性の方が、熱心に用具・機材の写真を撮り、採寸をされていた。後日お話を聞くと、自分の家でこうした漉きばめ用具・機材を作ってみるつもりだという。技術面についても、研修を受けるなどさらに学んでいくつもりだとお話しされていた。その熱心さには頭が下がる思いがしたが、「学んだ経験を活かしたい」という思いを市民の方と共有できたことは、素直に嬉しかった。私自身も、今後もこうした機会を積極的に探し、学びながら、また一方で経験を積んでいきたいと思う。

最後になるが、この場を借りて、当日講師をしていただいた多仁照廣先生と、このような機会を与えていただいた神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターに心からの謝意を表したい。

(この・みお／史料ネット個人運営委員)

田尻早苗家文書 仮整理作業について

豊岡市日高町にある田尻早苗家は、2004年の台風23号により蔵の一階部分が水損したお宅です。蔵を解体するにあたって、史料ネットが2005年8月に段ボール20箱分の史料をレスキューしました（古文書自体は2階に保管されていたため水損していません）。レスキューした史料は、同町にある但馬国府・国分寺館に保管していただいておりますが、このたび館内の保管場所の移動にあたり、8月2～4、24、25日の計5日で仮整理を行いました。今回の整理作業は、寄贈・寄託手続きを進めるための点数把握（概要把握）を目的としましたので、①史料に付箋をつける、②デジタルカメラで史料を撮影する（但し、撮影はスナップ程度のもの。基本的に表紙のみ撮影）、③撮影済み史料についての情報（付箋No・文書名・年代等）をExcelで作成した調査票にその場で入力、④撮影・目録作成済み史料を中性箱に詰め替える、という方針で臨みました。参加者は下記の通りです。

第1回 田尻早苗家文書仮整理

日時：2008年8月2～4日

作業場所：但馬国府・国分寺館、日高農村環境改善センター

参加者：石原由美子・板垣貴志・加藤宏文・川内淳史・木村修二・河野未央・添田仁・前岡孝彰・松下正和・森脇崇文、博物館実習生4名、「先生のトライやる」の中学校教諭1名の計15名

第2回 田尻早苗家文書仮整理

日時：2008年8月24・25日

作業場所：但馬国府・国分寺館、日高農村環境改善センター

参加者：石原由美子・板垣貴志・奥村弘・木村修二・添田仁・中野賢治・前岡孝彰・松下正和、「先生のトライやる」の中学校教諭1名の計9名

今回の整理では全ての史料を整理することができませんでしたが、中性紙箱44箱分（約2000点）の目録作成と史料の撮影を行いました。保管場所は引き続き但馬国府・国分寺館にお願いしていますが、今後は所蔵者と豊岡市教育委員会とも協議しながら寄贈・寄託手続きをすすめていきたいと思っています。整理作業にご参加いただいた皆様、整理場所を提供してくださった豊岡市教育委員会の皆様、ありがとうございました。以下では、整理作業に参加いただいたお二人の感想を紹介いたします（事務局）。

■田尻早苗家文書仮整理合宿に参加して

川内 淳史

去る2008年8月2～4日および24～25日の計5日間、兵庫県豊岡市（旧日高町）において、2004年台風23号被災史料の整理・調査作業が行われた。私は日程の関係上、2日と4日の2日間のみ参加となったが、地域における歴史資料のあり方、そしてそうした歴史資料に対する史料ネットの取り組みを考える上で、非常に有意義な機会となった。

今回、整理・調査を行った史料は、旧日高町の田尻早苗家所有の史料群で、状態は比較的良好なものが多かったのであるが、ダンボール数十箱にも及ぶ史料群が、もし史料ネットの活動により救出されな
NewsLetter2008.10.27 No.55

ければ、自然災害のドサクサに紛れて、そのまま失われていた可能性があったことを考えるとゾッとする。歴史資料から「過去」を復元するという歴史家の営みは、歴史資料が存在することで始めて成立する。特に地域における歴史資料は、文化財指定でもされない限り、誰にも顧みられることなくそのまま眠り続けるということは多々ある。こうした“日の当たらない”史料がひとたび散逸してしまうと、そこから「過去」を復元する機会は永久に失われる。その様な事態は単に一史料群が失われたということのみならず、営々と築き上げた人類社会の歴史にとっての大きな損失であると言える。そうした意味において、史料ネットが発足以来行ってきた史料レスキュー活動とは、歴史資料という「モノ」を救うことのみならず、史料から紡ぎだされる「過去」自体を救うことであると言えることができるだろう。

また今回の作業を通じて、そうした史料ネットの活動は、その歴史資料が存在する地域社会の方々と協力があってはじめて実現するものであることを改めて痛感した。史料から「過去」を紡ぎ出す歴史家の営みは、社会との協力関係によって成立する共同作業である。今回の作業を通じて、そうしたことを考えさせられた次第である。

■田尻早苗家文書仮整理合宿に参加して

森脇 崇文

去る 2008 年 8 月 2 日から 4 日にかけて、兵庫県豊岡市日高町において、2004 年の台風 23 号の際に救出された、同町田尻早苗家文書の仮整理がおこなわれた。私は二日目からの部分参加となったが、この作業を通じて感じたところを書かせていただきたい。

作業は仮目録の作成を目的とし、二人一組となって史料のクリーニング、文書番号を付した付箋の挿入、点数把握、写真撮影、パソコンへのデータ入力などが分担され、私は主にクリーニングと付箋の挿入を担当した。クリーニングとは、要は文書のホコリ払いだが、これが並大抵ではない。近代文書が主とはいえ、優に百年モノのホコリが積もる文書群。マスクをしていても何度も咳き込むこととなった。ひどいものになると、泥づくりのトックリバチの巣が何個も付着していたりする。付箋にしても、本・帳簿・書状・絵画・小物類に至るまで、あらゆるものが雑多に詰め込まれた籠の中の混沌に秩序を与えることは想像以上に難しく、何度も頭をかかえる羽目になった。しかも人手も時間も圧倒的に足りない。まさに悪戦苦闘を絵に描いた有様だった。

今回の文書整理はとにかく時間との戦いで、一点一点を吟味していく余裕はまるでなかった。その意味で、学校の演習で学ぶような理想的古文書整理とは程遠かったといえる。しかし、潰される蔵からの文書発掘の場で、あるいは災害の現場から担ぎ出す文書に対して、理想的な文書調査をおこなえる場合はまずないだろう。限られた時間と人手の中で、後世に文書の情報を伝えるべく、いかにクオリティの高い仕事ができるか。そういう「実戦」の経験を得ることができた点で、今回の調査は私にとって貴重な収穫となった。

幸い(?) 田尻早苗家文書の仮整理作業はまだまだ終わりそうもない。これからも整理作業に微力を注ぎつつ、「実戦」の知識と技術を身につけていければ、と思う次第である。

史料ネット NEWS LETTER No.55 2008 年 10 月日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1

神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後1時～5時)

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/> e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp

史料ネットブログ開設しました!! http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net